

ボンディングの形成不全に関する質的研究

—妊娠期から産後までの縦断面接より—

出口 愛

妊娠産褥期に、母親が子どもとの情緒的な絆を発展させていくことは母親のメンタルヘルスと子どもの発達において最も重要な心理的過程である。母親から子どもへの情緒的な絆はボンディングと呼ばれており、子どもを可愛いと思う、愛しいと思うといった感情を指す (Kumar, 1997)。一般にボンディングは妊娠期から産後3か月の間に形成されるが、ボンディングの形成が遅れたり、欠如する母親も存在する (Brockington, 2003)。

先行研究では、ボンディング形成不全の評価方法の開発や (e.g. Brockington et al., 2001)、ボンディング形成不全のリスク要因についての量的な検討 (e.g. Condon & Corkindale, 1997) は行われているが、ボンディング形成不全に関する質的な検討は乏しい。本研究では、ボンディング形成不全の母親の妊娠期から産後までの継続的な体験やその背景要因を質的に検討することを目的とする。

本研究は、国際病院機構長良医療センターとの共同研究の中で行ったインタビュー調査のデータを用いた。産科を受診した母親を対象に、妊娠期と産後のそれぞれの時期に半構造化面接を実施した。合計8名の母親のインタビュー内容を用いて、ボンディング形成不全における背景を検討した。

その結果、ボンディング形成不全の背景として、(1) 妊娠や出産の経過、(2) 出産や育児の経験、(3) 母親の妊娠の受容、(4) 他者からの受容、(5) サポートの有無、(6) 子どもの特徴、(7) 子どもとの関わりの7つが明らかとなった。これらは大きく【母親の背景要因】、【環境的な背景要因】、【母親と子どもの相互作用による背景要因】の3つの背景要因として分けることが出来ると考えられた。この3つの背景要因がボンディング形成不全の背景要因として重要であることが明らかとなった。